

半土蛎属 OSTREAE TESTA

(基原)

本品はカキ(マガキ) *Ostrea gigas* Thunberg (イタボガキ科 Ostreidae) の貝殻(左殻)である^{1) 5) 7) 9)}。

大変種類が多く、現在これらは属を細分して次のようになっている。

マガキ(長牡蛎) *Crassostrea gigas* THUNB.

(大連湾牡蛎 *C. taiienwhanensis* CROSSE)

近江牡蛎 *Ostrea rivularis* GOULD (*Crassostrea rivularis* GOULD)

イタボガキ(密鱗牡蛎) *O. denselamellosa* LISCHKE

コケゴロモ *O. circumpecta* PILSBRY

イワガキ *C. belcheri* SOWERBY

オハグロガキ *Saxostrea mordax* GOULD

ケガキ *S. echinata* QUOY et GAIMARD

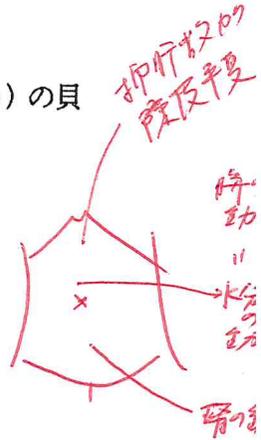
カキツバタガキ(覆瓦牡蛎) *Pretostrea imbricata* LAMARCK^{2) 13) 14)}

※マガキには殻の形が多種あり、小形の不定形の個体をシカメ(*Crassostrea gigas shikame*) 伊曾蛎といい、細長く大きく成長したものをナガガキ、エゾガキ(*C. gigas elongata*)、草鞋蛎、丸く平たい殻のものをカキ(*C. laperosii*) 黄蛎というが、いずれも個体変異であり、マガキに含まれるもので異名である^{2) 13)}。

原動物は、日本列島の干潮線に生息し、日本沿岸で盛んに養殖され、分類学上 *Mollusca* (軟体動物) *Pelecypoda* (斧足綱) *Pseudolamellibranchia* (擬鰓目) *Ostreidae* (イタボガキ科) に属するもので、左殻が深くて他物に固着する。殻形は変化に富むが多くは亜卵形~楕円形、外面は淡灰褐色~灰褐色、不規則な輪脈及びひだ状の突起があり、周縁は波状のひだとなる。内面は灰白色である。外とう膜の縁はやや黒味がある¹⁾。

(性状)

不整に曲がった葉状または薄い小片に砕いた貝殻で、完全な形のは長さ6~10cm、幅2~5cm、上下二片からなり、上片は平たん、下片はややくぼんで、その



辺縁は共に不整に屈曲して互いにかみ合っている。外面は淡緑灰褐色、内面は乳白色である。におい及び味はない。(においがなくなるまでよくさらす。)¹⁾

吉益ぼれいは重き灰褐色の粉末なり。梅花ぼれいは碎きぼれいとも言はれ、細かき碎片よりなる⁸⁾。

天からしにする。

(産地)

マガキ：北海道、北鮮、中国東北部の沿岸¹⁾。

その他：日本(広島県に主産、その他静岡県、千葉県などで養殖している)

中国(江蘇、浙江、福建、広東、河北、山東、遼寧省など)^{2) 7)}。

(品質)

日本の市場では、雨ざらしになって古くなったものほどよく、また、外面が青白色のものがよいとされる¹³⁾。

形が大きく、泥土が付着していないものがよく、内面に光沢がなく腐敗しているものはよくない⁷⁾。

新しいものがよい。(一色直太郎、香川修庵『一本堂薬選』)⁷⁾

陳旧なるものがよい。(吉益東洞『薬徴』)⁷⁾

(成分)

炭酸カルシウム CaCO_3 を主成分(80~95%)とし、少量のリン酸カルシウム $\text{Ca}_3(\text{PO}_4)_2$ 、Mg、Al、ケイ酸塩などの無機塩類、 Fe_2O_3 、微量の硬タンパク(ケラチン質)、アミノ酸類(Lys、Tyr、Cys、Met、Leu、Arg、His、Pha、Thr、Val)、glycogen、betain、taurine、glutathione、trimethylamine、oburidine、adenine、venerupin、glycolipide、succinic acid、vitamin A、B₁、B₂、D、F、ステロール、脂肪などを含む^{1) 2) 5) 7) 9) 13) 14)}。

(現代薬理)

○免疫賦活作用^{5) 7)}

水抽出の中性多糖を主成分とする画分は、正常マウスで抗体産生細胞の増加、

細胞性免疫増強、マクロファージ貪食能の亢進を示し、6-MP投与による免疫不全マウスで抗体産生細胞数の減少を防止あるいは回復させる作用が認められた。また、水製エキスは、脾臓の抗体産生（IgM）細胞数を有意に増加させるが、これは天然マガキで最も強かった。

○PH調節作用

熱水抽出液のPHはアルカリ性であるため、他の生薬の多糖成分などの溶解を上げる溶解補助作用が認められる⁵⁾。

煎出条件に影響を与える。（牡蠣の有無により茯苓から煎出される分量が変わったり、サイコサポニン組成比が変わったりする。）⁷⁾

○制酸止痛作用⁷⁾

○○

（古典的薬効・薬能）

薬味：鹹（洪） 薬性：平（または微寒） 帰経：肝・胆・腎経^{2) 5) 9)}

神農本草経：（上品）「牡蛎、一名は蛎蛤、味は鹹、平。池沢に生ず。傷寒・寒熱・温瘧洒々・驚恚怒気を治し、拘緩・鼠瘻・女子の帯下赤白を除く。久しく服すれば、骨節を強くし、邪鬼を殺し、年を延ぶ。」^{7) 12) 13)}

薬徴：「胸腹の動を主治し、驚狂、煩燥、失精を兼治す。」^{2) 5) 7)}

名医別録：「留熱の関節、営衛にあるもの、虚熱の去来不定なるもの、煩満、心痛、氣結を除き、汗を止め、渴を止め、云々」¹⁾

一本堂薬選：「盗汗、自汗を止め夢遺の精出すること、胸中および心下の痞悶を遂す。」

中医学：重鎮安神・平肝潜陽・収斂固澁・軟堅散結・制酸止痛^{5) 9)}

牡蠣の味鹹はよく堅を軟らかくし、性寒は能く熱を清する。また驚を鎮め、澁を固くする効があり、陽を益し、陰を潜し、以て精を固め、汗を止める。「牡蠣散」を止汗に用いたり、「固精丸」を遺精の治療に用いたり、「牡蠣丸」を崩漏に、「清帯湯」を帯下に用いるのは、凡べてこの収斂、固澁の作用を応用したものである。王好古は「牡蠣は足の少陰に入り、堅をやわらかにする剤である。柴

胡と共に用いれば能く脇下の硬を去り、茶と共に用いれば能く項上の結核を消し、
大黄と共に用いれば能く股間の腫を消し、地黄と共に用いれば能く精を益し、収
澁して小便を止める。腎の経の血分の薬である」といっている。また成無己は
「牡蛎の鹹は以て胸膈の満を消し、以て水気を泄し、痞するを消し、硬きをやわ
らかならしめる」といい、これらは臨床応用上参考にすべき言である²⁾。

(その他)

- 「道家の方では左顧(左をみる即ち口が斜に東に向かっているもの)を雄とす
るので牡蛎と名付け、右顧のものを牝蛎という」(陶弘景)
「牡といったのは雄を意味したものだ」(陳藏器)
「純ばら雄のみで雌がない。それ故牡という名称が生じたのだ。蛎といい、
①②というのはその物の大きいことをいい表したものだ。」(李時珍)²⁾。
- 学名のOstreaはかきのことをいうギリシア語のostreonに由来する。gigasは巨
大なという意味で、マガキには北の方に産するものに、長さ40cmに達する大き
なものがある¹³⁾。
- 和名のカキは、この貝は石からカキ(掻き)おとしてとるから、あるいは、殻
をカキ(欠き)砕いてとるから付いた名をいう¹³⁾。
- 中国では牡蠣殻を火で加熱したり、酢につけたりして修治しているが、日本で
は省略されていることが多い⁷⁾。
- 薬用とするよりむしろ粉にして、他の栄養物と混合し、小鳥の飼料としてアメ
リカその他の国に輸出している^{2) 14)}。
- カキは洋の東西を問わず食用とされ、その養殖の歴史は古く、ヨーロッパでは
既に紀元前1世紀から始まったといわれている。日本では寛文13年(1673年)に
広島で始まり現在に及んでいる^{1) 2)}。
- 牡蛎身(特に腓臓を含む部分)の抽出物がウサギの血糖値を下降することは知
られている¹⁴⁾。
- 「牡蛎を処すべき病者は、生来、または誤治により身体虚弱、腹部軟弱にして、
未だ陰証に陥らざるものなれば、本薬はこの体質と胸腹動などを主目的とし、
驚狂、煩燥、幻覚、不眠などの精神症状を副目的として用うべきものなり」
「本薬の作用は大いに茯苓に類似するも、その間自ら別あり、すなわち、茯苓

の気は手に応ずること小なれども、本薬の動は大なり、茯苓には、筋肉痙攣あれども本薬にはなし、茯苓には渴症なきも、本薬にはこの症あり。また、本薬の作用は、黄連に類似するも、黄連は実証にして本薬は虚証なり」（湯本求真）⁷⁾

- 「牡蛎、黄連、竜骨は同じく煩燥を治す、然れども各々主治する所有る也。膈中は黄連の主る所也。臍下は竜骨の主る所也、しかして部位不定にして、胸腹煩燥するは牡蛎の主る所也。」（吉益東洞『薬徴』）⁷⁾

（参考文献）

- 1) 日本薬局方 第13改正
- 2) 和漢薬百科図鑑 難波恒雄著
- 5) 生薬ハンドブック ツムラ
- 7) 漢方製剤の知識 薬事日報社 ツムラ
- 8) 新古方薬囊 荒木性次 方術信和会
- 9) 漢薬の臨床応用 神戸中医学研究会
- 10) 薬徴・類聚方広義 西山英雄 創元社
- 12) 神農本草経 森立之 昭文堂
- 13) 意积神農本草経 小曾戸丈夫 築地書館
- 14) 和漢薬物学 大塚恭男 南山堂